

三ノ輪銀になって勇者
となりました！

レフェル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある少女がいました。

それはある少女を助けるために選んだ道を願った少女。

どんなに果てしない道でもそれを選んだ彼女に憂いなどないだろう。

目次

プロローグ	1
はじまり!	4

プロローグ

アニメを見て死ぬ彼女を見て助けたいと思うようになり、気づいたら車のヘッドライトにきづかずにはねられていた。

目を覚ますとそこには椅子に座り、こちらを見ている女性がいた。

周囲を見ていると、声をかけられた。

「——さん。 単刀直入にいいいますと、あなたは不幸にも死にました

あれ、あなたの名前がうまく言えないわね。 なにかされた？」

ああ。 やっぱりと思つていて……。 不思議なことを聞かれた。

いえ、覚えていないですと、言うと。

水色で長い髪の女性は驚いたようにこちらに詰め寄る。 ち、近いんですが？

「そこまで冷静でいられると不思議でしょうがないわ」

いや、だつてなんとなくそうなのかくつてな感じでしたし。

「軽いわね、あんた」

現実味薄いのかもかもしれませんね。

「まあ、いいわ。 わたしは女神のウンディーネというの」

水の神様ですか。

「そう、精霊にもいるらしいけどね。まあ、そんなことより！

あなた、転生とかに興味はないかしら？」

ありますね。なんとかして助けたいアニメのキャラがいます。

「なら、その世界に行かせてあげる。能力を自由に選んでちょうだい」

え、いいんですか!?

「ええ、それで助けることができると思うのを選ぶのよ？」

はい！じゃあ、満開の後遺症を癒すことってできますか!!?

「まあ、できるわね。でも、できるのは他人のよ？ 自分のはできないからあきらめて

ね」

それでもいいです!!

あとは、そうですね……。瀬戸大橋戦の戦いで銀ちゃんを生存させる力をください

!!

「いいわ、それじゃあ。そこに居てね」

そういうと魔法陣が光りだすのが見えたの気に意識を薄れていく。

「行つてらっしゃい。あなたの好きなキャラクター全部の力をいれといたから生き残

ることはできると思うわよ？」

という声が聞こえた後に本当に意識をなくした。

くくく

どうもみなさん、三ノ輪銀です！

え、どうなっているかって？

あの女神さん、なんかわからないけど三ノ輪銀として転生させたみたいなんですよ。

どうしてそうしたのかいまだにわからないんですけどね。

まあ、銀ちゃんとしての生を満喫していこうと思います。

死なせたくないし、自分も死にたくないですしね。

いつでもこい！とはいいませんが、なにがなんでも生き残る気でおります。

そうしないと悲しいので！

あ、お母さんに呼ばれたので行ってきます！

どうかわたしの活躍をよくみていてくださいね！！

それでは、みなさま。またお会いしましょう♪

「銀〜!!」

「今、行く〜!」

はじまり!

おかしい、朝起きていつもどおりに起きているのに。
なんでよりもよって困ってる人が多いんだろう。

あ、銀の体質につられたのかな?

もしそうだったら悲しいとかかなんというか……。

道路を渡れずに困っているおばあさんをつれて行ったり、迷子の子供を家まで送り届
けたり。

犬に逃げられた人のために代わりに捕まえたり。

他にも数えきれないほどのえとせとらをしてきましたよ、ええ。

まあ、そのせいで遅刻なんですがね?

「うおおおおおおお! 間に合え~~~~!!」

わたしは走りながらそう叫んでいた。

そんなことしても間に合うわけがないのね……。

慌てて教室に滑りこむと……。

「せ、セーフ?」

「間に合ってません」

おずおずと尋ねると、出席簿で頭をたたかれた。

ああ、やつぱしそうなるよね。

「いったあ!?! 痛いつて先生!」

そんな抗議も焼け石に水なわけです。と教室の席に着席する。

あゝ、朝から疲れた。

と、教科書教科書。

ランドセルから教科書を取り出す、わたし。

原作なら忘れているんだろうけどねく……。

それにしても小学生からやりなおしとか勘弁してほしいよなあ……。

あ。視線を感じるけど、これって鷲尾須美さんだよ。

まあ、生真面目な子だからそうなるよね、うん。

でも、これだけはどうしようもないのさ。ずつとつづいていく運命みたいなもんだ

からね。

「あれ、銀ちゃん。目が悪くなったの?」

「ん? まあ、ちよつとね」

女子生徒の一人に聞かれて苦笑いしながらあいまいに答える。

そう、わたしは眼鏡をしているのだ。

これはとある贈り物によるものだからいまのうちに制御できるようにしないとけない。

「起立」

「礼」

「拝」

と、いつもどおりの言葉。

こんなこというのもなんですがね。

これからさき、やってゆけるか不安にもなるんだよね。

わたしというイレギュラーがいるからなにか変化あるかもしれないからね。

「——あれ」

「え?」

「あれ〜?」

急に時が止まったように見えるけど、これはあのシーンで間違いないんだろうなあ。

須美は驚いているみたいだし、園子も不思議そうにしている。

さて、初陣となるわけだけど、ここはなんとかしないとイケませんにやあ。

「っ。まぶしー」

視界が光で覆いつくされていく。

これが樹海化というものなのだろう……。

そして気が付いたら周りはテレビでみたあの光景が広がっていた。

怖いと思った、でも、逃げたくはなかった。

世界が壊れるのはすぐ嫌だから、それだけはすぐ嫌だから。

「ひゅ……。これが樹海化ってやつか」

内心は恐怖を覚えつつも平静につぶやいてみた。

とりあえず、記念に撮っておこ。

パシャリというシャッター音を鳴らしておいた。